



病院と災害

病院長 長倉和彦



新年明けましておめでとうございます。平成18年5月に、病院の移転新築を契機に、名称を武蔵野陽和会病院とし、急性期と回復期の二つの機能の病棟を持つようになってから12年余りが経ちました。これまで一病院としての役割を果たせてこられたのは、日頃の地域の皆様のご協力のお陰と、心より感謝しております。



昨年もまた、大きな災害が日本を襲いました。7月には西日本で記録的な豪雨災害が発生し、200名以上の尊い命が失われ、住宅被害も48,000棟余りに及びました。亡くなられた方々のご冥福を祈るとともに、被災された皆様が一日も早く元の生活に戻られるよう心より願っております。

2011年の東日本大震災を機に、病院をはじめ、各企業や組織が災害への対策をより強化してきました。東京直下型地震は、高い確率で近い将来に発生すると予測されています。武蔵野市内の医療体制も災害への準備と対策が急務であり、市を中心として様々な検討がなされています。昨年10月には、武蔵野市と医師会が中心となり、当院や各医療団体と合同で、直下型地震を想定した緊急医療救護所の訓練と武蔵野赤十字病院などとの医療連携訓練が、当院と市民公園を舞台に行われました。当院からは20名余りの職員が参加しました。大きな地震でも、病院や公共施設は比較的機能が守られるように設計されています。停電しても、しばらくは発電機などにより呼吸器や手術室などの最小限の機能は保たれるようになっています。直下型地震など大きな災害が発生して停電等に見舞われた場合には、病院や公共施設などに多くの人が集まってくることが予測されます。緊急医療救護所は、大災害の発生直後に病院の近くに設営され、怪我や急病等で来られた市民の皆様が混乱しないように、医師会員や病院が協力して対処することを目的としています。またそれには、武蔵野市内の医療体制と機能を壊さないようにという別の意味も存在します。一見すると単なる訓練と思われるかも知れませんが、市役所、病院、医師会、歯科医師会、柔道整復師会、各福祉関連団体、多くの学生ボランティアなどが、何回も会合を繰り返してようやく成り立つ訓練です。災害緊急時に混乱しないよう、事前の準備は不可欠です。病院そのものも、災害に強い施設とともに、災害に見舞われても機能をできるだけ保てるように体制面での強化が必要です。日本という国は、いつも厳しい自然災害に見舞われる国であり、日本人には、自然の脅威に対する畏敬の念とそれを受容する心があります。辛くとも事実を受け入れ、粛々と対応することは大切であり、日本人の美德の一つでもあります。ただ、準備不足のために結果として被害が拡大しないよう、日頃からの心がけと準備が必要です。武蔵野市民に支えられている一病院として、責任を持って日頃から災害発生時に向けた体制作りと施設の整備・管理を徹底したいと思います。



院内の事業としては、4月に当院の電子カルテシステムを一新します。より使いやすいシステムを完成させ、病院と皆様との距離が一層近くなることを期待していますが、導入直後の一時期は多少ご迷惑をおかけすることがあるかも知れませんが、ご理解とご協力のほどお願いいたします。本年が、皆様にとって良い一年になることを願っております。

今、日本はこれまでにない高齢社会を迎え、団塊の世代が後期高齢者となる2025年問題を目の前にしています。当院では、訪問診療部門も設け、法人内には訪問看護ステーション、老人保健施設、介護付き有料老人ホームもあり、地域完結型を目指す地域に密着した医療を提供しています。これからも地域のニーズに応え続ける法人の一員として尽力していきたくと思います。

